

はは  
姑・サツキ④

親には1日も長く生きていてほしい。そう思うのは残されたもののエゴだろうか。尊厳ある死とは何なのか。姑が亡くなって15年が過ぎようとしているが、姑の晩年は本人にとって納得できる生き方だったのかと、未だに自問自答する。

平成6年晩秋、姑の認知症は自宅での介護の限界を超え、私たちはまず精神科の病院を頼った。幸いすぐに入院させてもらえることになり、その数か月後、当時出来たばかりの老人保健施設へ入所。まだ「認知症」ではなく、「痴呆症」と言われていた時代の事だ。病院や老人保健施設の職員の対応は、やさしくはあったが、時に子供に対するような、時に事務的なような、家族としては少し悲しくなってしまうようなこともあった。

それから半年ほど経った頃、当時家から一番近い特別養護老人ホーム「かねやまホーム」に入所させていただくことが出来、心からホッとしたものだ。しかし、その安心は長くは続かず、入所してしばらくした頃に転倒し骨折して病院へ。手術しリハビリが必要と言われたが、認知症の姑が安静に出来るとも思えなかったし、リハビリの指示が理解できるはずもなく、どの道寝たきりになるだろうと、私は手術には消極的だった。だが、特別養護老人ホームはあくまでも生活の場。手術し回復しなければ施設には戻れず、夫とともに悩んだ末、姑に手術を受けてもらうことにした。

姑は大腿骨頸部骨折と診断され人工骨頭置換術という手術を受けた。手術後は「点滴を抜くから」という理由で手足をベッドに縛られ自由を奪われた。あっと言う間に認知症は進行し、会話も成立しなくなっていった。

手術で入れた人工骨頭は何度も脱臼し、その都度手術で入れ直した。3度目の脱臼の際にとうとう主治医は「人工骨頭を抜く」手術を行った。姑の身体に何度もメスが入り、何度も麻酔をかけられ、身体を拘束された。手足の関節は曲がったままになり、口からご飯を食べることも出来なくなり、栄養不足もあってお尻には床ずれも出来た。主治医から経管栄養を薦められた。胃ろうを造りチューブで食事を流し込むことで、栄養を摂れるようにする方法だ。

私たちは姑の回復を信じて経管栄養を承諾した。この頃の姑は表情が無くいつも涙目だった。私たちも面会に行く度に悲しかった。どこで何を間違ったのか、時を戻したかった。自宅で介護できなかった事を心から悔いた。

姑は半年ほどの入院を経て、病院の隣にある老人保健施設に入所した。そこで1年ほどお世話になった後、姑はようやく以前いたかねやまホームに再入所できた。そして私の20代は終わった。

姑はすっかり寝たきりになっていて、会話も出来ず、口から食事も食べられず、一日のほとんどをベッドの上で過ごした。しかし、特別養護老人ホームのゆったりとした時間の流れが合っていたのか、職員の話す奥会津の言葉が心地よかったのか、その頃の姑は、少し穏やかな顔つきになっていた。面会に行くと、何かを話したように声を出すこともあったし、孫の顔を見ると嬉しそうにニコニコしていた。縫物が上手だった姑は、ベッドの上でも縫物をしているような手の動きをよくしていた。

一度だけ、家に連れてきたことがあった。経管栄養が繋がれていない間のほんの数時間だったが、ご近所やご親戚の方にも来てもらい、姑に会ってもらえることが出来た。本人も、きっと喜んでくれたと思っている。

最晩年は経管栄養もうまくできない状態となり、中心静脈栄養（IVH）という、血液の中に直接栄養を流し込む方法で命をつないだ。夫は「どんな状態でも、母が居る、生きて見守ってくれていると思うと、頑張ろうと思える」と言い、出来る限り家族で面会に行った。

そうして10年以上もの時をベッドの上で過ごした姑は平成20年5月に89歳の人生を閉じた。花々の美しく咲く季節に姑は逝った。

最期は家族みんなで身体に触れ、さすり、声をかけ、抱きしめた。黄泉の国に一人旅立とうとしている姑に、心からの感謝を込めて「ありがとう」と言った。

意思表示が出来ない姑は尊厳ある死を迎えられたのか、一日も長く生きていてほしいというのは子供のエゴなのか、答えは見つからないが、姑は最後の最後まで力いっぱい生き抜き、今でも私たちに「生きる」ことを問い続けている。